新編水滸畫傳

五

ヘ21
875
15

門人遠21
號 875
卷 15

神書佛書醫書國書
備本 手本 新古書賣買
手遊いろく清書仕間
御注文承ハリ上
浅草町三休橋西入
河内屋孫兵衛

明治三十二年十月十日 購求

新編水滸画傳卷之拾五

東武　高井蘭山翁　譯編

○呉用生辰綱を智をもつて奪ふ

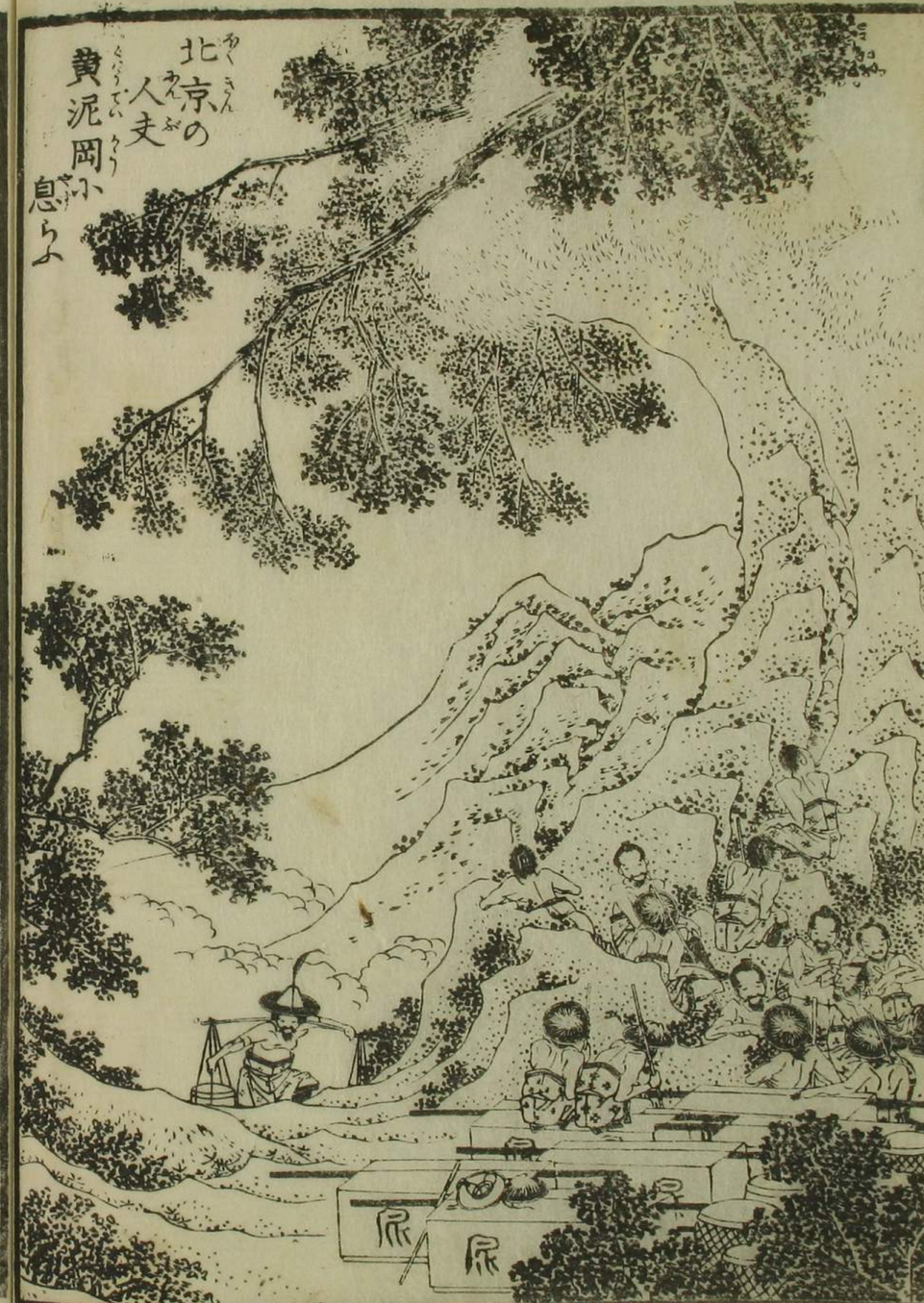
偖も楊志に呉せられし。女人の虞候。まゝく倦じ疲れ。柳の樹の下ふ立憩ふて。老都管を待文。これふ告て云ふ。楊志今素女人を罵て云感況表了。彼い呉提轄のふうして何ぞ彩雲礼と見やゆ。彼くい老奴管。彼を厳しく来殺ゆ。老奴管ゆ云向に如京を出る時。相公已に我等三人ふ命じて。楊志が下知ふ驚拗なと。再三命を奉りぬ。これ我に我乱を忍び声を呑で。彼が自像を立て虚目ふ覗て耐へり。彼れを代女日ハ我も渠を憐ゝと方寸に遍れり。此根〳〵ハ相公の命めりに依て。彼を来殺をすべ女人の虞候が云。相公の命じ宮ふ而ハ。此見尚危の撲撲ふて。年

不忘に出る須く何ぞ再三これをもちりめんや。老級管がいふく。今日は先ず花くこれを尋ぶべしとて。その日申の刻に結庵を求めて歇りぬ。此時十人の廂禁軍は汗に汗を流して大ぶ嘆じ乃ち老級管ぶ対していひ給ふ。我輩不幸にして、廂禁軍となり。かく辛苦き苦を天ぶも。後日幸撫を蒙ひ。剩へ此あ日は日中ぶも歇まず。動ぶ勃癘く策らる。人の分い共も然しきも級て用じく父母の皮肉に系ぶ仮令幾さ分しられ。何ぞかくの如く苦を蒙るや。老級管が云。汝ぶ先怨を休よ。我系に系ぶ汝らを苦く賞すべし。廂禁軍ぶが云。老級管のごく人皆怪めらべ来り嘗て怨る所なし。況れや世間に兵情きを人多しとて。私ぶ楊志を識て。その疾ハ名歇るべし。翌日天色いまだ明ざるに。十人の右齊しく起立源ぶ来りて。楊志を呼起しれば。楊志起上り。大ぶ罵て云。汝等匹夫何ぞ

ぶあ立んに云ぞ。時分は我提綱をべきを。妄ぶ愛さとるべし。廂禁軍等ぶ云。朔の内涼しき時ぶ往ざれば日中熱くして往ぶ悩めり。楊志が云。汝等愚者ぶとも暁んぬ。我が下知ぶ背く。痛く敲べきこと。遂に策と為て。大ぶ怒しるぶ。廂禁軍ぶ已むを得ずして。再び歩卒ぶ中ぶぞ怒るべし。此日楊志は歩に辰の刻ぶて起上り。乃廂禁軍ぶと偕に已ぶ旅庵を去り。一刻片時も歇ず息とも絶ず急しく。廂禁軍は大ひぶ怒り憤る。人の虞侯は老級管が弟ぶ来て。楊志ぶと議られた。一巻梁中書の命も。楊志も別勇の人なれば。老級管は只ぶ肉に。楊志を怒りて。既にして孫を約て十日ぶ及び足。十人の廂禁軍ぶ乗く倦疲れて。楊志を寛ること限なし。此時六月暑ふて天気大に熱し。殊に此日の孫は嶮しき山路にて。十人の廂

禁軍ホ遂ホ腿酸脚軟て。為らるる莫古ホ苦しみ。十ロ人私に云合せて。柳の樹の下に。擔を卸して歇んとしるれば。楊志これを見て策を揚声を励ま。罵りるハ。汝等ハ何を辨ざる愚人なる。ハ如ハ村里に日ごとに何ぞ心を安んじ歇んや。一刻も早く急げと。尚先ホ進で弛るれば。十ロ人のも齊しく楊志を恨ミ怨に詬々訥々罵詈。尚時楊志遂ホ流人ゞ倦怠して。山中の険路を行る如に。時已に午の刻に至て。暑熱いよく酷し。路辺の小礫。渾て焼て火の如く。踏ごとに流人大ホ脚を痛め進むを難び。愁て云るハ。かゝる暑に片時も休せざるハ人を晒殺す乃理ゝ。楊志これを聴て大ひに怒まれ。汝ホ蓋多れを云ハるまく。命の惜を弛るべし。彼暑をゝれるを。汝ホを歇ま。流軍漸く楊志ホ陪て往るれば。時を移さず。十ロ人のも暑の上に弛登り。暫く息を續んとする如に。彼十ロ人の者。悉く擔を卸し。松の樹の蔭ホ臨り倒れて。再び起上ざるを。楊志見て大に怒し。乃ち十ロ人の若ホ向て云るハ。汝ホハ如を思へるや。見列第一の愚者。速に起て。暑を弛れ。十ロ人ゞ云。我等ま擔を肩ホ入るる。見下ハ。ゞ仮令身を七八段に斬裂るを。実ハ行を能ハず。楊志恚て跟り。藤の策を以て数くホ打るれば。これを打起せば又倒れ。彼を敲起せば又倒れ。楊志もよホ能しる如に。老幼皆と人の虞候ハ如ハ老系を見て。急に楊志が前に来りて云るハ。楊提轄。彼ホと怨ミ。ホとるれ。我等も実ホ如ハ炎暑に若て。一歩も進ざ。楊志が云。老幼皆ハ如ハ弱盜の出没。乃ち名づけて英泥鰌と。太平の時ゞ。白日ホ盜賊出て。旅人を劫ホ。況や今の時前に進ん。如ハ如に暑を歇て憩んや。人の虞候これを安

北京の人夫黄泥岡ニ息ふ



云ふは楊提轄はいくばくのことを云て人を嚇しやる。我まづ見を
を作じが已。老婆曾が云。指且彼を歌て日中るなば。又好孫を促て行ひそん
や楊志が云見る所とるふい尚七八里の孫あり。之方は路て險阻の徑て
一間の破廟もあしいんで能休ひ処に休んや。老婆曾が云。我はたばく。且
休処に歌んで後より来んに。汝は先ふ行ひ人。楊志見を笑て老婆ふも及
ばじ乃ち策を拳て彼十四人のもを責て云。汝らまく起上て休ひ所とるべ。
若我下知に従はずんば。二十敲を与へんと。狂歩に恚りれば。十四人が間一
人いまく我等は百十行の手擡を為ひるゆゑ。分辨大に疲て。多もぐの
人と同じうして。楊提轄は何を以て人を禽獸のごく戲ひるや。あとひ梁中
書相公自ら来て監押しやうを。容ひぬぐ〜ん。楊提
轄洋うに見を察しやへ。楊志大ひふ怒て云。汝ふ小人。何ぞ我ふ贅拘や。

我今汝等を二十敲ずんば休まず。そて。又藤の敲拳て。敲くれ歩られい。
老婆曾大ふ嗚つて云。楊提轄且彼ふを敲ことを止て。我云ことを聞け。我
家の蔡太師に従て好公の職をなせし。附門下の虎軍千とをく方と
をく。をく況を低て我を為敬しぬ。我自誇言を云ふわ〜ざれた。汝ごと死い。
元し。死に為るの流人へ。強を相公尿奴微ふ憐を畜ぬひ。遂に汝を擢拳て。
提轄の職を授けるひぬ汝かくのごと死ふ職ふ立て。何ぞ直ふ自大を振舞
儀為を人ちるや。我ふ見相公の家の孫曾なるこふ扱を。仮令微ふ民の
老翁ようとも。乃を知人い年長の誅を容四。強るに汝我係を容ずして。
一向彼十四人の者を策ふ見いうる不為ぞや。汝自ら汝が分を忘て知れ
楊志が云。老婆曾汝ふ家来牢中の人ようして。蔡太師の家中て生ぜし
る四名ありて乃中。の子雖万者を知ば。汝ふ能我不為に従へべし。相公

汝ホも命じて。不侵ひ度乃中の林梁らして下知を背くまじく嚴ホ
言ひしハ忘れらるや。老拳骨ガ云我も等て江川あ廣ホの地をこ道中の
若恐も畧これと伐ぬ何ぞ汝ガ云ごれのこまんや。楊志ガ云今の時ハ太平の
時ホ比しガ汝これと一列にうるとなれ老拳骨大ひホ恚て云汝ガ今の一言ハ
と割舌と割の罪ホ当れり。今日の天下ハ。太平あらざるや。又相公汝と旅行の
林梁らしむとハ一時の接待。尚府の英言なるとなれ妄ホ自大なるこて忍なれ。
楊志再恚怒んとする所に。俄ホ向の松林の内ホ人影ありて。一人の漢子ハと躍
脳と探て私に楊志ホガ掙ふと見看楊志られこえて云るハ。老拳骨林の内と
看よすでに盗賊出ぬ。こちまち鞭と弁刀と携林の内ホ走入列罵り呼ら
て汝ハ者ハ檀に我擔子と窺ひうるど。ホ仕と去んとして。後とるに。七人
車と排並べて。七人の漢子来除ホ来る。此内一人の漢子。竪の辺

に大ひなる茶砂汀ある老先力とれて。楊志ガ恐に怒ぶ。ある六人の人も
一度に喊んで跳ある。楊志大ホ怒ていく。汝ホハ何人なるや。七人の人ガ云汝ハ又
何者なるぞ。楊志これと答て大ホ吼て。汝ホハ必ず賊徒ハ。七人の人
哈々と打笑て云汝ら。て賊なんホ。又て我ホと賊と。我ホハ本貧き商人なれバ
汝に与ふ財宝なし。汝達ら。に平と起もとなれ。楊志ガ云汝ホ我ホ與ふ財宝
なんハ何と我のく汝に与ある。財宝あらんや。七人の人又問ていく。汝ハ実に何者
なるぞ。楊志ガ云。汝ホハ先何れの所ホ出所を。なん七人ガ云ハ。
我らハ本濠州の麦商人なるガ。今東京ホ運んで商ん。欲し。既ホ此乃とる
美泥岡の上ハ。白道ホも賊あて。旅人と劫ふ。多及ず。絶れ我等ハ
の麦あて。為て残残ず。加ふ敢て。然乃とる今此所の上ホ。出つて。暫く熟ぞ
漂ら。乃れ暫く先車と待て。休息とる。所に俄ホ人あると。来て賊ふんと

躍ひ私ホ一人を出して汝を窺ふ。楊志是を聞て初て心安じて云ふハ。
ホ来かくのごとくんバ。ハ。是一枝の經紀人。汝今私に我を窺ひ看ふ。恐くハ
盜賊ならんと思ひ。別に紙に徙入て汝らを見るべし。七人ハ云既に紙の如んバ。
互に吳儀氏。李容樂と再ひて異氣を避ぬ。楊志が云我素ふ惡ハ嫌
ひ。こゝて別又刀を提て擔の辺に佇ふ。老拳曾楊志に向て已に絨めバ。
我等ハ是を見るべし。楊志が云我向ふハ絨ふんと思ひしホ是を糸に惡を
運ぶ經紀人ならんかしも怕ることなし。老拳曾が云汝ハ今彼を見て盜絨と
云て我らを驚ぶるなんぞ。又經紀人なるも。楊志が云汝幸ふるんバ。ふれ
幸ひなるん。何ぞ只顧我を充るや。驚く先に所に佇ふ日中迄こ深しき風
起しバ。方に此是を見るべし。十四人の廂禁軍是を聞て一笑を催し。時に楊
志ハ一辺の樹の下ホ坐して。暫く扇を搖て憩ひ居る如に遠の下ふ一人
の男一荷の桶を挑ひ檀ホ曲を唱て是を上り来るを曲ホいふ

赤日炎々似火燒　野田禾稻半枯焦
農夫心肉如湯煎　樓上王孫把扇搖

那漢子既に是の上に登り来て。松林の裏に桶を卸し。坐をなして。
憩ひ納涼。十四人の廂禁軍ホ即ち彼漢子ホ問て云ふハ。汝が此桶の内ハ。
何ぞ。彼漢子答へていふく我此桶の内ハ乃ち白酒。廂禁軍ホ又
問ていふく。汝何れの所に運でこれを賣や。彼漢子がいふく是の下の村ふ居て
売てこれを賣ふ。廂禁軍ホがいふく幾ばくの價ホ一桶を賣や。彼漢子が云
実に一桶ふ付ハ又貫の價。廂禁軍ホ是を受て商議して云ふハ。我輩
又熟く又渇きて。是を買て。是氣を避ま
ん。十四人のもの。一同に飲りと既で。別殘を出し合んとしふ所に。楊志これを

看て。大に怒て云るハ汝等流人何をするぞ。廂禁軍ハ若ていちく。我輩酒を沽て飲んと欲る也。各自の殘を湊んとを。楊志ハ怒り罵て揚。又步罵て云汝ハ我下知も法ぞ。何ぞ妄りに酒を沽て飲んや。廂禁軍ハ云。拽朴又我書を開しむるや。各自らの殘を出して酒を沽に拽輩何の干るこらあれて。ハ彼人を打ふや。楊志ハ云汝匹夫各分に大事のをもを忘れ。ふくもにを貪るや。汝らうてを中の艱難をもゝぶ。徒に義ぐくの豪傑が。乃中ハ旅て。高りに酒を飲。遂に蒙汗薬ハ中られ。身を要れて。絨の毛に害せらる。汝し必ず武酒を沽とをうん。彼漢子ハ云を吟て。楊志を見て冷笑て云。汝ハ旅客ハ何ぞかく若恩を一列ハ。ふるや。我ハ一ふくうるをとをもふ。ハ迎若ハも乃ぶまじきハ。晩泉套話を吟ものうるとて。又松の樹の下に来て。狂開しうるを。ハに對面の松林の内より彼来客毎を小刀を拽て走りお乃宮て云るハ汝ハ武ハ。ハ酒の幸を開ぐや。那酒賣漢子が云。我武酒を思の下の村ハ。運んで賣んと思ひ先醫時ハ。ハ小休息し。累来を避んとする。ハに彼客ハが酒を沽んと云ハ。我ハ價を論ずるのをもて。まぐ酒をも賣ず。紙彼一人の旅客我武酒の内ハ蒙汗酒を入ふんとを。豈脇来ハにあらぬ。来客ハ七人見を吟て。哈々と步笑て云るハ。我ハ只絨来ふると思ひしに。ハ来かくれぐくの幸なるハ。縱ひ闘しハとて。何の妨うあらん。我等も幸ひ酒をなと思ふ。折義なるに。彼客ハすでに疑をなるハ。汝肯て我等に賣ハへんや。彼漢子が云。我酒の内ハ蒙汗薬を入るるハ。ハ沽ふとをうん。我も又賣ずまじ。七人の来客がいとく。汝何ぞかく言を一列ハ。敘るや。我等ハ若て。汝が酒に蒙汗薬の入ハとハいえば。汝疾一桶を分つて我ハに賣れ。世ハふ又多く湯茶粥等を施してぞふも人の飢渇を救ふ若人もをぞと。汝いうんぞ

我ホガ渇ヲ救ハザルヤ。彼酒賣ガ云。客ホ酒ヲ賣ンホハ〳〵モ爭フ所ナレ。刘彼客ホ恐云セ〳〵レ。二ツホハ椀瓢ニシテ。酒ヲ酌飲シ盡ルヲ待ハザル由ニ。是ヲ賣ザル。七人ノ客ガ云。碗瓢ハ我客ニ携ヘ来ル。汝是ヲ盃トセザレトテ刘椰瓢ヲ出シ。又一盤ノ麦ヲ推ケ来テ。七人ノ客。遂ニ桶ノ傍ニ立寄。互ホ目ト目ヲ着合セ。遂ニ桶ノ蓋ヲ開テ。酌〳〵酒ヲ酌乃チ麦ヲ食ヒ終ニ再ビテ。是ニ飲ル程ニ。時ヲ移ス。一桶ノ酒ヲ飲乾ル。已ホシテ七人ノ客ガ云ルハ。我ホ〳〵。價ヲ問ザル。汝僕ヒ。幾ヲ求ルヤ。那漢子ガ云。價ハ実ホ各目十貫ヲ以テ。二桶ヲ賣。一桶ハ各目又貫ナリ。七人ノ客ガ云ク。價ハ汝ガ云如ホ捉ハン。只一瓢ノ酒ヲ添テ。我客ホ飲シめんや。彼漢子ガ云。添ルヲ終ホ〳〵。我多年酒ヲ賣シラ。値ノ外ニ酒ヲ添ルヲ。ヒ時彼七人ノ客ノ内。一人ハ價ノ残ヲ償ヒ。又一人ハ私ニ桶ノ蓋ヲ開テ。一瓢ノ酒ヲ酌テ。これヲ飲レバ。彼漢子是ヲ見

テ。大ホ怒刘酒ヲ棄ひ〳〵ンとシ〳〵ル。刘ニ彼客ガ云ニ。松林ノ内ヲ見ン。テ逃入〳〵ル。彼漢子モ亦ホ追蒐ル。ヒ時又一人ノ客ガ。一瓢ヲ抜テ。彼漢子ガ背ニ繞出。乃チ桶ノ蓋ヲ開テ。ほ〳〵と一瓢ノ酒ヲ酌。已ホ飲ンとセ〳〵刘ニ。彼漢子これヲ見テ。飛ごと〳〵ニ跳回リ。ホ彼客ノ酌持ル酒ヲ棄ひ〳〵テ。忽チ桶ノ内ニ。ふつ〳〵入。乃チ又桶ノ蓋ヲ緊ト蓋〳〵テ。七人ノ客ニ向テ云ルハ。汝七人ノ客ハ相貌モ異ラヌガ。何ホ云一瓢ノ酒ヲ貪テ。かく開〳〵めんどゝ。漢ホ人物ト大ニ相違シ〳〵ル。酸鹹酸ホ〳〵ンとゝ罵リ。ろ〳〵さて。彼十一人ノ廂禁軍ホハ。ヒ光景ヲ見テ。頻リニ羨〳〵。酒ヲ飲んとヲ欲シ。其内一人ノ廂禁軍乃チ老孰管ニ向テ云ルハ。老孰管ハ。何ヲ見ルヤ。彼客今一桶ノ酒ヲ沽テ飲ルヽ。ども。ろ〳〵吳俊ヲ。我客モ彼一桶ヲ沽テこれヲ飲。喉ヲ潤さバ。大ひニ快ん

実に中毒ぎ渇すといへども。武辺に水を需め飲べき不なし。然くい老故管我ホが為に冒し〳〵揚提轄に告なりんや。老故管これを聞て已も一盃飲んと欲し〳〵別楊志ホ對〳〵て云るハ。彼枢密客既に今一桶の酒を沽れて飲れた。又に別後なし〳〵我等まも彼一桶を沽れて。十四人の等に飲〳〵て渇を救ふべし〳〵。武郎ハ一点の水をも干るとなしず〳〵。彼酒を乞ずんば。何を以て渇を潤さん。吾〳〵ハ提轄見と奈〳〵免し〳〵。楊志見を聞て心中に思へら〳〵我今武郎に立て見るふかの枢密客らぶ酒を沽て飲れを見に別後もなし〳〵。彼一桶の酒の内も又一人の枢密客これを盃採て呑ぬ。定めて彼桶の内なる酒も別後ぬまず。我向ホ数度十人の廂禁軍を痛く禁れば。せあて酒を買〳〵め。懐りとも息させんと思ひ乃老故管ホ告て云るハ。老故管再之何を尽しあふに我これを容ひざるも等礼こゝろく十人の等に。

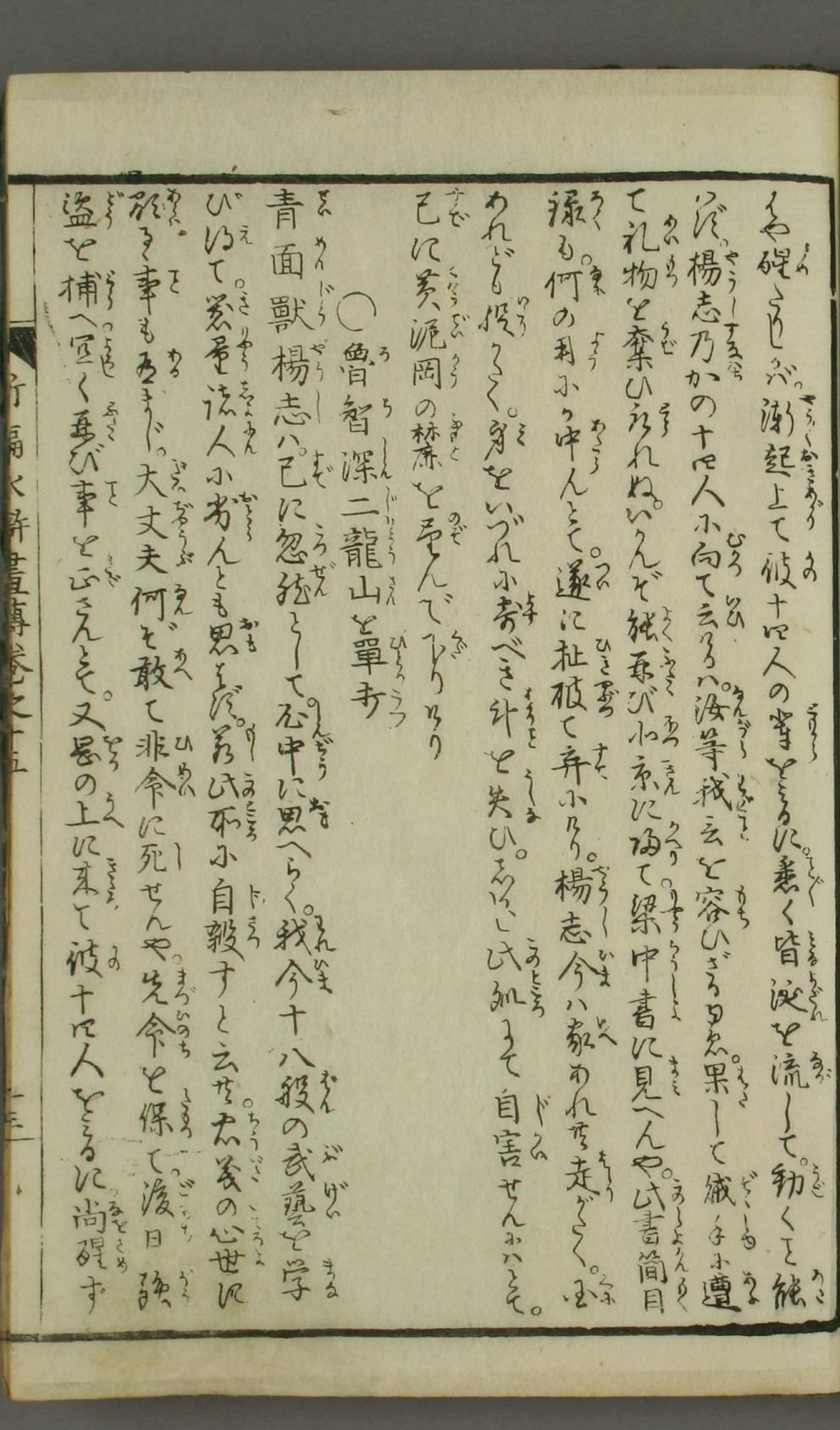
酒を沽しめ又酒を飲ずらバ不遜見を尽るべし。十人の廂禁軍ハ楊志が武一言を聞て大ホ怒び刹又奥の猿を奏て。酒賣漢子ら糸に来て酒を沽んと乞れば彼漢子が云我武酒の内ハ家汗茶を入置し也。汝ホ賣を絶ふまじ。十人の去ホ笑て云るハ。汝何四ホ小しきを懐て彩いりのや。彼漢子が云我実に酒を賣まじきに。汝らいんぞ我を嫌るや。武時乗客ホ酒賣漢子を指て云るハ。ひろんで汝ぎ彼客を懐るや。客ホ又いとく汝を立て云る紀等こそ。彼漢子を傍に推のけ乃酒桶を抜て彼十人の去に与へて云〳〵ホ不ふく飲ず人我等敢て。彼漢子ホ皆り武酒を賣こ。十人の等大に怒び。急に彼椰瓢を借て。一向ホ盃で

瓦を飲棗客ハ又一盤の棗を十一人の方に送てこれを看也のとぞ云れた十一人厚く瓦を謝し。系〻故なして。何ぞ能く客の腸を交ゆさんや棗客おゞ云。必ず慇懃の礼ハ乃ぶまじ。故て瓦円孫の旅客。何ぞ百十箇の棗を車とちんや。十一人の客これを謝し早て。二瓶の酒を酌で。老故管と楊志とよ為ふ。老故管これを飲しかども。楊志ハ受て瓦を飲ぞ。衆人の虞候も各一瓶の酒を飲て又楊志ハ勧む。楊志ハ酒を好まざれども。一ハ暑氣を避んと思ひ二ハ衆人瓦を飲れた。更に別条なく白日已に午瓶の酒を飲て。又幾ばくの棗を吃しられぞ。十一人の客ハ楊志も又酒を飲るを見て。私に心を安んじ物の遠慮もなく弥る〻ま捕の酒肆を迂ぞこれを飲乾り。彼酒賣の漢子十一人の方に對して云るハ。武捕の内なる酒肆に一人の棗客一瓶を酌て飲しぶ。武ぞ値の中あて嫌やさんに。五貫五百文の

多目を償ひ。又十一人の客瓦を吸て何ぞ僅々の事を論ぜんやとて。五貫の多目を与へ〻ぶ。彼漢子大ひに悅び。遂に客を捕を荷て再び屋の下に下り。彼七人の棗客ハ林蔭ふ立ち。十五人の者を指して云るハ。汝ホ已ふ我が計ふ中ぬりふく倒んでこと云もあらざるに一行渾て十五人の客忽ちを瓦麻木て盡く地上に歩倒れ。恰も死人の如くして。尚只動くその眼眼のみ。武ハ七人の棗客ふ七箇の車を牽出し。彼棗客を乗て北上ふ去十一梱の金銀珠貝を。乙のまに棄ひ。悉く車に載一度に吐と遠化好と叫んで黄泥岡の麓を望む。一系に下り。楊志瓦を見て。系〻後悔せしの渾身癍麻れ。力ハ勧さ働くと雖ども。十五人の者共。悉く徒に眼を開て七人の棗客ふが。誕辰の賀物皆棄て。屋の下に逃行を歩眺て。茫然り。偖武七人の棗客ハ。使と尋るに。系来これ晁蓋。

曹正楊志と追て其武藝に感伏す

呉用公孫勝劉唐阮小二阮小五阮小七等ハ彼酒を賣る漢子ハ乃是白日鼠白勝ハ彼酒の内にいろゝして義汗茶と用ひるやと云に成二桶の酒ハ原是茶と用ざる好酒ハ内に一桶の酒ハ七人の毒薬を欲ぬ彼一桶の酒の内おも毒茶をさゝ楊志ら十五人小勧しめんが為向小劉唐私に酒桶の蓋を開て一瓢の酒を盗でこれを飲ぬ此時白勝ハ故意怒り祈ひて



ます劉唐が盗ひ飲る一瓢の酒を奪ひ捜さんと欲し。直に劉唐と逐て林の内小入るべき時呉用私に酒桶の傍に来て遂に一瓢の酒を盗で義手飲仝せ給ふ白勝ハ為ぶくゝ小徘回り急に呉用が盗持る一瓢の酒を引搶て桶の内に移し入ふたゝび蓋を緊くして義ぶくの怒を云と云るが此乃ち計て義汗茶ハ此時呉用がよろゝ入れ小ろり。扨かの十五人の毒ハ尚毒茶碍げて。折倒れ立るが内楊志一人ハ原酒とおし飲るゆゑ法人小先達て。

死碍を呼ぶ。涕起上て彼十四人の骨を見に悉く皆涙を流して。動くを能ハ楊志乃かの十四人小向て云るハ。汝等我云を容ひざる日ハ果して滅亡小遭て礼物を棄ひ入れぬいんで能取び小原に酒て梁中書に見へんや。此書簡目孫も何の利小ハ中んとて。遂に杜彼て弁ふり。楊志今ハ家あれを走ぐゝ。ほれども投ぐゝ身をいづれ小寄べき什を失ひ。ゆゑ此に茶泥岡の林を呼んで下りり

已に茶泥岡の林を呼んで下りり

○曾智深二龍山を單手

青面獸楊志ハ已に忽然として石中に思へらく。我今十八般の武藝を学びて茶是法人小者んとも思ふ。茶此不小自殺すと云ふ太義の心世に孤る事もあまり。大丈夫何を敢て非命に死せんや。先命を保て後日孫盗を捕へ冥く再び事を成さんと。又岸の上に来て彼十四人をとるに尚碍ず

して効くを吋び楊志大ふに罵て云。汝等匹夫我金言を容ひざるが如く強盗の計に循り。累空に我身ふ及べり。今更後悔をも何の益あらんとて。遂に松樹の下に立考朴刀を執刀を挿し。犯人を縛して四方を顧るに更に一物も遺りざりしぞ。楊志大ふ嘆じて曰ら居下つて独行り。彼十四人の輩ハ既に二更の時に至て。漸程逐個個ふ起おの〳〵大ひに苦憂。這ハ如何ちんと喊びる時。老故管先流人ふ対して云るハ汝等楊提轄が金を喫ざりしが。今日此所ふて命を果すに到れり。流人ぞ云るハ事已に敗れて歎くも遅るまじ。宜く先商議をなして。一命を脱るべし。老故管が云汝ふいうる見識ありや。流人ぞ云。此度のことハ故て我等がまこと拙れ強ふいまく。火焼身に到ることは。各自らを去て掃ひ蜂蠆懐ふ入ときハ随て即衣を解といふ。楊提轄此度変にあらバ云ぐ所とのれ。今楊志ハ往方をもとめ。蕩行れバ。我等ふ累に及て。梁中書相公ふ見へなバ罪を楊志が身の上に負けて云べきハ。楊志乃中に生て。只願我が等を策うち。剥盗絨ふを沢〳〵ふて。我等を歎きい迎に蒙汗薬を飲せて。凌辱の礼物を〳〵奪ふ。已に往方もとめ。逃去ること所べし。老故管先ぞ曰て大ふ悦び。乃又商議して云るハ既ふかくのごとくんハ。明日黄昏の夜府に行へ。女人の虞侯を盗て絨を分ち。我等十二人ハ各に身ふ具に及て具しく相公ふ告知しめ。乃ち文書を以て蔡太師ふ所へ。ふ速済州府ふ命じて絨を捕へしめん。今宵ハ先旅庵を求て歇むべしとて。各又路を下り。更び近の村へ立返る。庵を求めて休息しぬ。翌日又廟禁軍ふ。女人の虞侯を引て。直に済州府に到る。具に次第を所へ。叔又楊志ハ已ふ黄泥岡を去て。南の方へ出て斗独て日已に晩れバ。夜も又三更の九例に至まで息をも続ぬ。是ふ仕せて

急ぎ出で、已に林の下に出て暫く木蔭に立倚て休息し、心中に情おもひ
多ハ方辺に盤纏已ホ尽き、且又此辺一帯の知音もあらざれハ、何の為ぞ
て、此艱難を免れんやと、頻りに嘆くと雖ども、憂愁ホ逼り来て、既して夜も漸く
曉なれハ、揚志又志を励し、冥く此涼しき所を急ぎ去らんと思ひ、遂に
林の内を出て、二十里ばかり進る処、茶面ホ一間の酒肆あり。揚志心中におもひ
る、ハ、茶酒を飲ばんハ、豈ら、飢渇ホ堪ん、且酒店に入て、胡乱に一盃飲んとて、
乃酒肆の竈ホ坐しなれハ、竈の辺ホ一人の女あり。揚志ホ宣て云るハ、貴家に
女史を求めんや。揚志が云、先酒を飲で、茶後飯を吃すべし。彼女これを聞て、
きかもち酒を温て、揚志に与へしぶ。一人の後生出来り、自ら此酒を師で、
揚志をお留む。彼女又飯を携て出られハ、揚志飯を飽まで吃し、乃ち銭を
立て門外ホ走り出、彼女急ホ喚つて云るハ、客未だ酒食の償も与へずして、

何由ぞ在を云ずや。揚志答て云るハ、我今身辺に持合ず。汝て回るさに
還しやうん。控く我ホ賒ひへ、必ず疑ふてまれとて、追ホて跑出て、彼後
生これを見て、お続て跑出、遂に揚志に追つて衣を扣へ、故もなく償を推こ
賒さする。理やあると罵られハ、揚志急に拳を挙て、彼後生を地上ホ打倒し。
已に跑ホ人とまる所に、後へより又一人の漢子追来て、奸賊を捉ることなれと罵
て、已に近くと雖ども、揚志彼漢子を見て、大脱膊ホ成て、手ホ一條の棒を
持てお迎ホ、揚志が云、汝ら盗のことをおさんとりよく同じんやとて、足を住て和
る処ホ、彼後生も又手に棒を持て、二三人の漢子を捉て追する。揚志私ホ思ひ
るハ、此途を持て、男ども殺しなハ、彼後生ホハ必ず迹を尋ん、と料り、急に
手中の朴刀を挺て、彼漢子ホ折て、葛の彼漢子も又途を捨て、お迎へ、間已に
三十餘合に及びる処ホ、彼漢子漸く力衰へて、揚志ホ欲まると雖ども、遮探ホ

ありて殆危うしが彼後生及び二三人の漢子一度に出とうられば彼漢子
却て圍子の外ふ跳出て大きに喝て云るハ互に皆々を勧すとうられ我一云
を冠るとりそ乃ち楊志ふ向て云るハ汝ハすこいうる人ぞよく姓名を報ぜよ
楊志これを聞て胸を拍て云るハ我ハ是昔名を更ぐ今姓を改ぐ乃ち青面獸
楊志とハ我事之彼漢子これを聞て即問ていく汝ハ是東京殿司
府の楊制使ふてハめ〳〵ぞや楊志が云汝いらんで我を知りや我ハ楊制
使〳〵彼漢子忙しく〳〵拳を棄て地上に跪て云るハ素眼わ〳〵之の豪傑を
識ず那くハ云礼の罪を免〳〵楊志ハ神を見て急に礼を還して云るハ是下ハ
是誰人なれぞかく慇懃の礼を乃ひあふや彼漢子答て云るハ素ハ東京完封
府の者〳〵乃ち八十万禁軍教頭林冲が外子姓ハ曹名ハ正と申人皆素が渾名
を称して操刀鬼曹正とひ別ハせり素幼に東京に生し時一人の富家なる

を顧客殘又子貴を素ふ借れらるあ此山東に来て商賣をするハ此ふ
悪ぜ本殘を損失いに乗び故に同郷く遂に嵩地酒肆の贅壻と
なりて此辺ふ移を営ぶ新婦の女ハ別我妻之彼後生ハ是妻が弟なり
素今制使と剛し時私ふ制使の武藝を試るに恰も我所林教頭と
同じ故に歎すること絶ぜ是ふ楊志ハ云原是下ハ林教頭の弟子なるあり
るふ是下の師ハ言体が由名に無実の罪に陥され今ハ別梁山泊ふ入て強
盗の所行とあるあひぬ曹正が云素も嘗ぐりハ受れども此ぐ事虚実を
ゑ〳〵ぞ那くハ制使志ぐ〳〵先我家ふ来て歇めへて遂に楊志を延て
私宅ふ於り賓客の坐已に定りれば曹正先彼妻が弟を呼で楊志に
まみへしめ子迷酒食を飾て楊志を歓待酒已に数巡りし而に曹正
又楊志ふ向て云るハ制使ハ此後ハ等の事ふ因て此辺ハ多りまふや楊

志昔て彼光石を失ひ。世度又生辰の礼物を失ひ事を一くに誅うられば曹正氏を笞て中源く懸ん。刑楊志小對して云る、既に斬られば系り家に嘗く逗留し奴童宜く高議も為べし。楊志が云ふ殿下の志ハ微に骨髓小徹し感激もいへども。氏処に逗留まるを能ふまじ。美逐捕のもの氏所に到ひ

と欲し。楊志が云今更何れ小往べき処ハ尚梁山泊小上つて殿下の師林教頭を訪んと欲し。我向に梁山泊の禁を過り時林教頭小出合て已に縁を交て残ひ又十餘合に及ひぬ氏時王倫我事が武藝を小見て遂に山陣に伴ふて行く欲待に到りぬ氏れ小我已に林教頭を嫌れり。事前も王倫再三我を山陣に留し。我ハ一つの金帛を添て更進退維谷に陥て再び彼処に趨て身を新ん

中意を思ふ。躊躇して未だ決せざる。曹正が云系吹王倫ハ公孫勝

くして人を用ること能ハ。我師林教頭肇て彼陣小入し時再三言を竭し。

第千仞を刊ひ。梁山塞に逗留せしと。制使先梁山泊小行くと

休更。氏近辺青州の内に一つの山あり。これを名けて二龍山と云山の上に一つの寺

あり宝珠寺と名く。究て険阻にして。彼寺を已方に引き蟠く最要害の

地に。唯一筋の路あり。山小屯る。今氏寺の住持還俗して。

僧も悪く改俗して。和尚ひ。総て百人を聚て専ら強盗をなし。金銀財

宝を劫て山中直正富饒なり。彼還俗して住持が名を金眼虎鄧龍

と号し。制使の命令を肯て強盗の内に加はらんと思ひ。彼変小行て命を

立身を安んぜらるゝ。楊志が云。すでに斯る所ハ迷小逐て彼小が内に

加りかさんとて。欲ハ曹正が家に一宿し。翌日旅費を借更て。朴刀を提

新編水滸畫傳卷之十五
十八

やうしろちしん
楊志魯智深と
戦て自らあらそ
和談をとざん
新編水滸畫傳卷之十五
十七

腰刀を著、遂に曹正に別れて二竜山へ急しぐき日晩に及んぐ。そや一つの高山を見む。楊志想道今青八先林の内ゆて一夜を明し来日ゆく山ゆ出べしとて乃林の内ゆ入る処に一人の大和尚赤條々ゆ裸て背の上ゆ多く花を黥し乃ち松の樹の下に坐しく納涼居る。楊志これゆ遇く先大ひゆ驚き乃。彼和尚已に楊志が林の内ゆ入るを見て禪杖を引提て眼を睜開て躍出て大ひに怒を励して云るゆ汝大漢子何れの所より来れる。楊志彼和尚が言葉を聞て。私に思ひるゆ武和尚も又是冥途の人こ我彼を図れば。且彼が出而を窺んとて刎大に呼つて云るゆ和尚ハ又いづきの処の人なるぞ彼大和尚答て足善ゆも及ず禪杖を揚してゆてる。楊志見て汝何ぞかく無礼なる。我が手ゆ来んせんとて刀を舞してゆ逆へ丈人勇を奮て。戰ひ已に二十合に及べども未ざ雌雄決せざりしぐ彼和尚故に圏子の外ゆ飛出て大ひゆ呼つて云。汝且歇め我一云を窺ん楊志乃ち刀を收め緩ゆ嘆歎して思ひるゆ武和尚何ぞかく武術の達人なるぞ我も只欲し闘の。そゆして撃入で勝を取ん遠をわび弦ゆ希ゆの恐怖ゆると未ざ思ひもて。彼和尚も又大ゆ呼て云るゆ汝ハ本何人なりや。姓名を報ゆ楊志云。我ハこれ東京の制使ゆ楊志なり。彼又問ていく。汝ハ東京にて。何を賣んとて。大黄牛二を殺せ。其面獣楊志ゆ云我を知ずや。楊志云。我が面の金印を見ゆ。彼和尚大ゆ笑て云我者ひに。此処ゆ遇るゆ。楊志ゆ云。和尚ハ東京ゆ居れば我剣を賣て。牛二を殺せしを知りゆ。彼和尚いく。我ハこれ延安府老种經畧相公の提轄なり。魯達と云し者。和年三拳を揮く。殊更ゆを歩殺し。此事ゆて又蓼山に上り出家せり。我背の上に花を黥刺しるを見て。人皆称して花和尚魯智深と云。楊志

これを吹て。呵々と歩笑ひ和尚ハ系是系とは。凡人の人より世間の人伝へ云
と吹ふ和尚ハ大相国寺に挂搭しゐるとなるに。何れ今ひ別れ来るれば。魯
智深がいふ。我幸ハ一言を以て尼しがたし大相国寺に立て菜園を掌りし時。
豹子頭林冲に逢て義を結び手後林冲ハ高太尉が不為ふて。実の罪
に陷され。滄州に流罪せられ。時監押の下友二人。高太尉が命を受て。
中ふ林冲を害せんとせ。四方に我を尋ちに林冲を送て滄州に到り。遂に林冲が一
命を救ひて。又東京にゆきに。彼ふ人の下友高太尉に若て云しい。野猪林の内
にて。已に林冲を殺さんとせ。しかども。大相国寺の魯智深と云僧ふ妨られ。剣へ
滄州まで送り来りし四方。ふを下し。林冲を害ずるとせ。叶ハざりるとせ。せ
依て。高太尉人を相国寺に発て。我を捕へんとせ。別れに。近辺の徒者ら。我ふ知と
若知せる四方。我別菜園廨宇に火を放て。遂に圏外ふ逃出。彼ふ走つて。

許多の四くを経繞しうた。分を亟べき地ふく。孟州の十字坡ふ到りし時ハ。
酒店の女房ふ蒙汗薬を飲ま。已に命を害せらるるとふ。高太尉の
飯に。我孫娘及び孫杖戒刀を見て。大ふ驚き。ひ和尚必定是者の人に
やしじ。宜く命を助けんとふ。迷解薬を飲せる四方。蒙汗薬の毒餓に解て。
再び命を免れ。彼夫又我を教日為め奔走し別義を盟で。兄弟の契約せり。
彼夫婦の者ハ元来世間ふ言名を豪傑にて。高夫が名ハ菜園子張青と云。
妻が名ハ母夜叉孫二娘と云。義を重んぜる方なり。我彼が家ふ逗留
て立る内に這れに二竜山宝珠寺とて。方命を為んで保つべき処。
を等及び特々来て。山中に加へんと欲しる処に。二竜山の絨首鄧龍我
を用ひざる四方。我彼と相闘ひしに。彼我に敗すること能ハず。山下ふ走る方の
関を牢く閉て出ざれバ。我今山ふ上るべき方を求れども。一偏に方を求れ。

山元来険阻にして。別に上るべき路もなく。遂に計絶る思ひ。惟冥を祷で。頻に祈りをなせども。彼且て見えず。忽び再び出て我が上を望み。見かに我大ひ小驚怪す。楊志見て呼ぶを聞て。忽び人乃ち林の内に坐して。孫新顧大嫂と。互に如何為すべきかを議す。楊志もまた牛二を殺したる事。忽ち官府に聞えんかを恐れ。延慶の礼物を失ひ事主を欺く罪。又曹正が教に因て。武山を訊問したる事を若て云るに。我も同じく武山に上らんと欲して来りしに。彼已に冥を冥び我等をして上らしめ盗賊を為て。宮〳〵先曹正が教に従て再び良策を図む。曾頭深見を呼て左と問ひ。果して楊志に引きて。曹正が教に依りしが。楊志初曹正を呼で。智深に遇しむ曹正大に怒んで。忙ぐしく酒食を設け。人を教唆して。二竜山を歩べき。計を商議せんを。曹正はらく智深が戦ふ。ふるを呼て。別人に対して云るに。彼果して冥ひて冥るべ。人はさて亜

千軍万馬を率て。攻るとも。山に上ることを能ふまじ。只宜しく智を以て。ベーカを以て歩べ。智深がいふ。我未だ彼と戦ひし時。我彼を蹴倒して。已に首を斬んとせしかども。山下の小嘍囉弟来て。遂に鄧龍を助け。山に登り来て冥ひ冥る由を。我再び山に上るを能ふ。只冥が為に生て。只願ふ所は。曹正が計を。今更いふ計ありて。これを行べきや。楊志が云。已に如くのごとく。我和尚と再び弟と奮て。冥門を破るべし。智深が云。今人の力を以ても。関を破ることは能はじ。別に計の行べきを。商議せんに。曹正が云。一の策あり。人を遣て。曹正が云。一の策あり。人を遣て。牛肉を買きたらしめ。楊制使は粽米を設て。武辺の百姓の装に扮ひ。孫和尚の禅杖戒刀を。包て小陽に変ずるの人を。添て。見せて。智深和尚を御め。糸自ら見て。二竜山の麓に。

乃呼て云べさへ。糸らいに近辺に。酒店を設て。管を吹る。此和尚糸が
店に来て酒食を喫ひ。手價の銭を惜べ。只顧大勢を倚て。二竜山を
歩行んと云て。糸〳〵を嚇しいれば。糸〳〵涙く是を恨て。乃彼が碎るを恐ず。
遂に是を縛ひ。この西忘に。ゐ迷大王に献りて。酒を呑と雖ども。彼必ずこれを信
じて。我們を山ゐ出りすべ。ゐ山陸の内ゐ到て。鄧龍ゐ對面をもとめ。速
に絆の索を引解て。孫杖を和尚に与へ。此時楊制使も。又刀を振つて
働き出。孫〳〵鄧竜を殺さんと。掌を反せるも易〳〵ん。ゐ鄧竜が殺
を。手段の小絨ゐは。悉く。降糸せんと。活実せり。糸が寸孫かくれば。あ公の
心いんと云られば。智深楊志を。奇斗として。大ゐ喜で。云るゐ曹正の籌策
通に孔明ゐも賽て。笑西明日ゐ〳〵斗を。ひ〳〵として。夜酒を飲て。酒を砂
各快く歌り

新編水滸画傳巻之拾弐畢

土の本上野ドサカ紙